

20109

FFR(最大充血時圧較差)と iFR(安静時圧較差)が乖離した一症例

「症例」56才男性、冠危険因子 喫煙, 高血圧, 脂質異常。「現病歴」安静時冷汗, 脱力感を 15 分程自覚し受診、心電図は、洞調律で V3~4 の T 波終末に陰転化を認めトロポニン I 0.30ng/ml であった。不安定狭心症と診断し緊急冠動脈造影を施行。左冠動脈主幹部 (LMT) に中等度狭窄と左前下行枝 (LAD) 近位部 (prox) ~ 中間部 (mid)、左回旋枝 (LCX) mid も中等度狭窄を認めた。引き続き冠血流予備量比 (Fractional Flow Reserve : FFR) を評価する事とし、先ず iFR (instantaneous wave free ratio) から評価した。LAD 末梢で iFR 0.93、LCX 末梢で iFR 0.98 であり、いずれも虚血陰性を示す値であった。次に FFR を計測した。LAD 遠位部にて FFR 0.80、LCX 遠位部で FFR 0.75 LCX 近位部で FFR 0.83 であった。FFR の引き抜き曲線より最大圧損失は LMT 病変と考えた。血管内超音波像で同部の粥腫に潰瘍形成 (ulcer) と血栓像を認め責任病変と判断し経皮的冠動脈形成術を施行した。LMT から LAD 病変までカバーするように薬剤溶出性 STENT を留置し LCX の開存を確認して終了した。「考察」ulcer を伴った LMT 病変で、iFR が虚血陰性で FFR が虚血陽性になる乖離を経験した。このような乖離現象は近位部病変に多く経験されるが、本例のように破裂した粥腫による乱流の影響が、最大充血時にはより大きく反映されるものと考えられ、治療適応を判断する際には注意が必要と考えられた。